

歴史的にみた神奈川の医療

大 滝 紀 雄

神奈川県の医学、医療については太古から現在に至るまでの連綿とした歴史がある筈である。しかし、これを系統的に資料面ないし生活面などから捉えた歴史は残念乍ら見当らない。本県においてはその足跡を解明し得るものは殆ど無いが、考古学的出土品、ないし民族学的に祭礼や行事などからの類推は可能である。これらについては石原明氏の神奈川県医師会前史などの著書にゆずる。

一般に神奈川の医療史に関しては次の三つの流れに大別することができよう。第一は鎌倉時代の医療である。第二は開港から急速に発展した横浜を中心とした西洋医学の受容である。第三は最近横浜ならびに県下から発見された江戸中期から明治期に至る古文書による研究である。

第一の流れは鎌倉時代に溯る。源頼朝が鎌倉に幕府を開いてから武家政治が始まった。平安時代の貴族文化は衰え平民化してくるのに伴い、医学は僧医の手に移った。医学だけでなく諸種の学問が実際的になってきた。真言宗、天台宗、禅宗を主軸とする仏教が盛んになり、一方これ迄にない医療の社会事業が行われるようになった。

真言律宗の宗祖とされる奈良西大寺の長老思円房叡尊（一一〇一—一二九〇）は中世における救療事業の先駆者と考えられる。叡尊の高弟妙性房審海を迎え学問寺としたのが金沢文庫称名寺である。文庫最盛期には約五万巻の蔵書があったと

推定される。文庫当初の蔵書目録は現存しないが、文献上から推察すると約三百冊の医書、それも主として新渡来の宗書を中心としたものであったらしい。なお称名寺結界図と古文書によると、救療施設を有していたことが確認されている。

良観房忍性（二二七—三〇三）の開山による鎌倉極楽寺が救療施設として栄えていたことは「極楽寺伽藍図」や桑谷の療病舎、極楽寺裏手にある忍性五輪塔等から推察される。

鎌倉時代を代表する著書としては栄西（一一四—一九五）による「喫茶養生記」（寿福寺蔵）や梶原性全（一二六—一三三七）による「頓医抄」と「万安方」があげられる。

第二の流れはペリーが浦賀へ来航した一八五三（嘉永六）年に始まる。鎖国の夢が破れて一八五八（安政五）年日米通商条約が結ばれ、横浜開港と共に短期間のうちに港湾都市横浜が誕生する。そのさい外国人を中心とした西洋医学の移入が活潑に始まった。神奈川においてはお雇い医師は少なく、系統的な医学教育の実施は見当らない。

外国国籍としては米、英、蘭、仏、独等があり、医師としての肩書きは宣教医、軍医、船医、公使館付医官、山手外人病院勤務医、十全病院（横浜市立大学医学部病院の前身）勤務医等種々であった。彼らは臨床医として、あるいはコレラ、ペスト、痘瘡、梅毒などの伝染病に対する防疫医として活躍した。

宣教医としてはヘボン式ローマ字や聖書翻訳で有名なヘボン（米）、初期の十全病院で活躍したシモンズ（米）らが挙げられる。英国公使館付き医師としてはウィリスが明治元年四月から七月まで横浜軍陣病院でわが国最初の本格的外科医として活躍、戊申戦争の患者治療に当たり、シツダル、ドングルイ、ゼンケンらと共に働いた。この病院は同年七月東京へ移り大病院となり、やがて東大病院に移行するのである。

山手病院の医師としてはジュンキンス、マイヤー、ダリストン（英）、メクル（仏）、ウィーラー（英）、マンロー（英）らがあげられる。梅毒病院では英国のニュートン、セジウィッキ、ヒルらが働いた。またフランス人医師兼法律家のムリエ、同じくフランス人マッセはミュレル、ホフマン来日以前の大学東校で講義をした。マッセはエルドリッジ、ヘール

ツ(蘭、葉学者)らと共に横浜山手外人墓地に眠っている。このほかウエッダー(米)ブツケマ(蘭)等が挙げられる。

第三の流れは最近とみに注目され始めた江戸中期から明治にかけての古文書資料による研究である。横浜の歴史という
と開港後が脚光を浴び、開港前は等閑視され勝ちである。しかし開港の頃でも現在の横浜十四区がすべて寒村であったわけではなく、最近鶴見区、瀬谷区、金沢区、緑区、戸塚区などから膨大な数の古文書が発見され、順次整備されつつある。横浜開港資料館にはいわゆる地方文書(じかたもんじょ)約一八〇〇〇点が収集され、佐久間家のものだけでも七〇〇〇点が数えられる。横浜市内だけでなく、川崎、藤沢、その他県内各地から発掘された古文書の解説も始まっている。それらの中から医学に関係する部分だけを集めた研究は、未だ殆ど手をつけられていないが、大変興味のあるテーマである。武州生麦村(現在の横浜市鶴見区生麦町)で名主を勤めた関口藤右衛門家の当主が代代書き継いだ日記は文化三年から明治三十四年迄ほぼ一世紀にわたって書き綴られている。こうした長期にわたる日記は全国でも珍らしく、初期の名主は医療にも携わっていたので医療に関する記事も散見する。幸なことこの解説が有志によってなされ、横浜市文化財研究調査会から「関口日記」として出版され、現在明治十五年まで二十巻が刊行された。

足柄上郡現医師会長の大内行雄氏は、祖先代々医業を継ぎ、同家に多数所蔵されている古文書を整理され、最近「江戸中期以降の大内家の古文書」を出版された。一七四七(延享四)年に始まる古文書にはきわめて興味のあるものもある
のでこれにも触れたい。